

【研究ノート】

私小説
つるし柿

増 田 辰 良

研究ノート

私小説 つるし柿

増田辰良

一

実家の祖母は、私が大学三回生のときに亡くなりました。七十三歳でした。あのころ、通夜、告別式、初七日、四十九日、その後の法要はすべて自宅でおこなっていました。実家は農家でしたが、屋内は広く、襖ふすまで仕切られた二間続きの座敷を、こうした日だけは襖を外して使っていました。畳の数にして三十枚ほどの広さになります。それでも祖母の四十九日の法要には座敷からあふれるほど大勢の人たちが集まりました。

法要では、農家のしきたりとして祭壇の近くに親父おやぢ、叔父さんたち、叔母さんたち、跡取り（長男）、次男、長女が座り、オトンボ（末っ子）の私は従兄弟たちと、その背後うしろに座っていました。

こういう冠婚葬祭のとき、農家では近所の小母さんたちが手伝いに来ることになっていて、母親かあやんを頭かしとして小母さんたちは参列者たちへの接待と食事の準備に追われ、台所で忙しく動いていました。彼女たちが座につくのはおじゅっさんへのお茶だしの後で、お経の始まる直前でした。

ほぼ全員の近親者や縁者が揃ったところへ、町内の支部長をしてい

る小父さんがやって来ました。

支部長は上あがりかまち櫃かまちに両手をつけて、一同にお辞儀をしてから、「遅れてすみまへん。どなたさんもお苦労さんです」

と挨拶をした後、前屈みのまま顔を突き出し、縦に開いた右の掌を上あに下かにしながら、「すみまへん、すみまへん」と、参列者たちの間をぬうように祭壇の前まで進み、分厚い座布団に正座すると、遺影に目をやり、手を合わせ一礼してから、蠟燭の火で点けた線香を立て、チリーン、チリーンとお鈴りんを鳴らし、また手を合わせ遺影に語りかけた。

「早いもんじゃな。もう旅立ちじゃなあ、君代きみよさん」

親父は、焼香をすませた支部長に、お礼を言い、座布団をすすめた。

「忙しいなか、本日はありがとうございます。さあさあ、こっちへ座って座って」

支部長は立膝のまま座布団ににじり寄り、「すみまへんなあ」と胡坐あぐらをかき、掛け時計を見上げてから親父に確かめた。

「おじゅっさんは何時なんじに来るんかいいな？」

「十一時と言うとったから、もう来るやろ。今朝は他にも法要が入っているそうだから、ちよつとは遅れるかもしれん」

キーワード…つるし柿、懐郷、墓参、血縁

こう答えてから、親父は、
「支部長さんにお茶を持って来てくれるで！」
と、小母さん連中に声をかけた。

それからおじゅっさんが来るまでのあいだ、集まった人たちはお茶を飲み、お菓子を頼張りながら米や葉タバコの出来具合、毎日変わる空模様や自分たちの体調などをにぎやかにしゃべり終えると、今日が四十九日の法要であることを思い出し、誰彼となく、祖母のことを話し始めた。

すでに亡くなっていた祖父の幼馴染みだったお爺さんは、遺影に目をやり、まるで生きている祖母に話しかけるよう口を開いた。

「この家の身代を熊吉さんと、ようこまで大きくしたもんだ。熊吉さんが早ように亡くなったから、苦勞も多かっただろうに、ほんまによう働く嫁さんやった。なあ君さん」

別のお爺さんの話し方は、祖母に心底お世話になったという気持ちにじみ出ている。

「うちは君さんに田植えから稲刈りやら小豆の取り入れも、よう手伝ってもらうた。働き過ぎたかもしれんなあ。お子さんたちも大勢おつたから」

「そうじゃなあ。私ら子供を七人も育ててくれたし、あの小さい身体でな。私を負ぶって稲刈りをしたって、よう聞かされた」

そう言い終ると、祖母の長女は鼻水を啜り、ハンカチで右と左の目頭を交互にぬぐった。

その横に座り頷き頷きしていた次女の叔母さんは、
「私がお腹から出てくる二十分前まで田植えをしとつた、とも言うつた」

と、その目には涙が盛り上がり、俯いた顔がゆがむと、涙が溢れ、喪服の袖で目尻を固く押さえた。

すぐに、隣のお婆さんが言葉を継いだ。

「そうそう、昔はこの嫁さんも、そうじゃった。家で産んだから。七人もなあ、君さんは」

その後ろに座る祖母と同年輩のお婆さんは俯いたままクシヤクシヤになったティッシュをしきりに広げて高々と涙をかみ、それを小さな黒いバッグにしまった。それから、気落ちしたような声音でぼつりぼつりとしやべった。

「君さんは、ほんまに上手につるし柿を作つとつた。達者なうちに教えてもらうておけばよかった。残念やなあ。順番からすると、次はうちや（自分）の番やからあの世で逢うたら、教えてもらおう」

それにつられて隣のお婆さんも、目頭を押さえ鼻をクシヤクシヤさせながら続けた。

「そうやつたなあ。商売になるくらい上手に美味く作つとつたあ。もう食べさせてもらえんようになってしまつた」

祖母よりも若く見えるお婆さんは、両手に包んだ湯飲みの中をじつと覗き込み、

「ここん家のしぶ柿は、他の家のものよりも大きかつたんで、皮を剥くにも時間がかかるし、竹竿も太目のものを用意せにやあならんし、棕櫚の葉っぱで紐も作らんといかん、とぼやいとつたけど、君さんは若いときから上手に作つとつた。それに何しても器用やつた。吊つて、揉んで取り入れるまでぜんぶ、自分でしよつたけんなあ」

としやべり終えると、何か得心したように顔を上に下に動かしてから湯飲みを口へもつていった。

こうしたお爺さん、お婆さんたちのおしやべりを聞きながら、私は

小学生のころ、納屋の屋根の丸い瓦に尻を下ろして祖母とつるし柿を食べながら交わした話を胸に思い浮かべていた。そつと顔を遺影に向けてと和服姿で写った白黒の祖母は笑みのあふれた優しい目でじつと私を見つめてくれていた。

私が郷里、徳島のことをことある事に聞かせるものだから、二人の息子たちも曾祖母が作っていたつるし柿に興味をもつたようです。それで私も祖母とつるし柿のことについて、少しでも想い出を書き残しておきたくなりましたので、書いてみることにします。

二

鏡開きの朝、私は階段の下から息子たちの部屋へ声をかけた。

「理人！ 啓人！ 今日鏡開きだから、自分の部屋とお父さん、お母さんの部屋に飾ってお餅を持って降りて来てくれ。それから玄関に飾ってあるものも台所へ集めてくれるかい。お父さんは神棚の餅を下ろすから」

「はーい」

「はーい」

ボタンボタンと階段に音を出させて先に降りてきた理人が玄関から戻り、訊いてきた。

「お父さん、柿はどうするの？」

「それも持って来てくれ」

次に、手の平に餅を載せた啓人が降りて来て、台所へ向かいながら餅の数を暗算した。

「二階は三個だから、えーっと全部で八個になるのかな？」

台所で待つ女房は男三人に訊ねます。

「お餅、お雑煮にしますか、それとも焼きますか？」

「お正月にお雑煮を食べたので、今日は焼いて」

先に啓人が答えた。

「じゃあ、焼いて砂糖醤油をつけて食べよう」

と、女房は結論を出すが一応、長男にも尋ねた。

「理人はどうするの？ 啓人と同じでいいのかな？」

「今日、お餅を食べると来年まで食べないよね」

「そうねえ、特別なことがない限り、普段は食べないわよ」

「じゃあ、僕は焼くのお雑煮の両方を食べたいな。来年まで食べられないのであれば」

「はい、分かりました。それじゃあ、お出汁をとったり、ちよつと時間がかかるから、朝は焼いてお昼はお雑煮にしよう。すぐにお茶を入れるから干し柿を食べててね」

女房は薬缶をガステーブルにかけた後、ガサガサと音を立てて餅にかかっているビニールのラップを外し始めた。

テーブルでは男たちがどの柿を食べようかと物色していた。すると好奇心の有り余っている啓人が、「はーい。質問があります」と手を挙げた。

「何んだい？」

「お父さん。どうしてお正月にはお餅や柿を祀るの？」

「それはだな。日本人が農耕民族であったということの証だよ」

「農耕民族？」

「つまり、五穀(米・麦・あわ・きび・豆)の守護神である年神様を家にお迎えして、その年の豊作を祈り、感謝するお祭りの性格があったのさ。だから米で作ったお餅を祀るんだよ。柿については幸せをカキ集めるという意味で祀るものだな。これはおせち料理によくある縁

起をかつぐ語呂合わせのようなものだけだな」

「なるほどね。お米も柿も、どちらも農家と関係するもんね。それで農耕民族ってわけか」

啓人のその声は謎が解けたというように弾んでいた。

「ところで、どうだ。美味いか？」

私は息子たちに訊いた。

「うん、美味しいよ。お父さん、この粉の噴いている方がもつと美味いけどね」

そう答えた理人は唇の両端を白く汚し、歯を見せて笑った。

「そうか。理人。そうだろう。この粉が大事なんだよなあ」

「ええっ。何？ 何かあるの？」

私は訊き返してくれたことが嬉しくて、子供のころに食べたつるし柿のことを懐かしくしゃべりました。

「お父さんが子供のころ、実家にはしぶ柿の木があって、お前たちの祖父ちゃんのお母さん、つまりお前たちの曾祖母、ばあやんが毎年、しぶ柿の皮を剥いて、納屋の屋号の前に吊るして、この柿を作っていたんだ。それをよく盗み食いして、叱られたよ。辰！ 盗人するな！ ずっと。吊るしてから何回か、揉み揉みすると美味くなるんだけど、それまで我慢できなくて盗み食いするものだから叱られたのさ。昭和三十年代の話だ。おやつなんか買ってもらえる家ではなかったのさ。冬場のご馳走が、このつるし柿だったんだ。ばあやんの作るつるし柿は本当に美味かったあ。売っているこんなもんじゃあなかったぞ。お前たちにも食べさせてやりたかったよ」

「そうなの。昔は自分家で作っていたんだ。揉み揉みなんて面白そうだね。でも、お父さん、今、つるし柿って言ったよね」

と、不思議そうに理人が訊いてきた。

(四)

「言った。これはつるし柿の一種だ」

私は柿をかざした。

「でもさあ、さっきお母さんは干し柿って言ったよ」

「ああ、お前の訊きたいことが分かった。お父さんの定義では干し柿とつるし柿とは違うんだ。干し柿は製品名だな。つるし柿は竹竿に吊るしてある状態を言うんだ。この吊るされた柿を食べるのが最高に美味いんだな、これが。分かったか？ 分かったら？ あはっはっはっ」

「変な定義ねえ。どつちにしろ食べるのだから同じでしょ」

女房が台所から声をかけてきた。

「いや、そうじゃない。食べる場所も大切だ。柿本来の味を楽しむのであれば、吊るされた状態のものを食べるべきだ。ビニールの袋に入れたらんじゃあ、柿が可哀想だ。作る人の身にもなってみろよ。完熟したものを袋に入れるんじゃあ、人の知恵はいらんわな。だから、つるし柿だ」

「変な理屈ねえ？」

女房はあきれたという口調でそう返してきた。

「まあいいや。さつきもしゃべったけど、お前たちも訪ったことのあるお父さんの実家には大きなしぶ柿の木があって、毎年、ばあやんが作っていたのさ。誰かに売ってお金をもらえるくらいの味だったあ。近所でも評判の味だったんだぞ」

「ミカンの木もあったよ。四月に訪ったとき黄色い実が木に付いているのを見て、びっくりしたよ。ここでは木に付いているミカンなんて見たことないから」

「そうだ。あれは夏ミカンだ。田植えをする五月のごろに食べると美味しいんだ。北海道じゃあ無理だな。育たない」

「井戸の横にはイチジクの木もあったよ。何かと思つて、じつと見ていたら伯父さんがイチジクだつて教えてくれたんだ。うす緑色の可愛い実が付いていた。家の裏はスダチ畑だつたし、竹藪もあつて山鳩がクウクウつて啼いていた。竹もこの辺りで見ると違つて太くて木ようだつたし。ねえ、兄ちゃん」

「ああ、あれね。まるで童話の挿絵とそっくりで、かぐや姫を想像しちゃつたよ」

「お前たち、よく覚えてるなあ。あのとき理人は二歳、啓人は一歳でなかつたか?」

「はい、お茶とお餅をどうぞ。確か、赤ん坊のときに連れて行って、その次だから、おばあちゃん(義母)のお葬式じゃあないかな。古い農機具や葉タバコの乾燥室なんかがあつて、面白がつて屋敷内を探検するんだと言つてはウロウロしていたから。きつと、四歳と三歳になるときだわ。お父さんが徳島の話を始めると終らないわよ。あなたたち聞いていいの? ほっほっほ。私も柿を一ついたたくわね」

女房は笑いながら話の輪に加わつた。

「いいじゃないか、なあ。お前たちの友達でミカンや柿の^み実る本州に親戚のある子たちはあまりいないだろ」

「うん。みんなこの辺りの子たちだよ。本州に親戚のある子はいないんじゃないかな?」

こんな確認をしてから、私は、またしゃべつた。

「お父さんは大学生になつて、実家を出て下宿をしたけど、スーパーでバックに入った干し柿を見かけても買う気がしなかつたよ。柿に限らず、ミカンもスイカも自分家の畑で獲れるものは、お金を払つて買うもんじゃあない、と思つていたから。でも結婚してからは正月に祀りものとして買って、こうして食べるようになったけど。これを食べ

るたびに、ばあやんのつるし柿を想い出すよ。悪さもいっぱいしたからなあ。よく叱られたよ。……ここは北海道かあ……想えば、遠くへ来たもんだあ」

こんなふうな懐古に耽け入りそうな私の気持ちを気遣うことなく、隣で柿を食べている女房が確認してきた。

「お父さん、この種^{たね}と蒂^{へた}は捨てちゃあいけないのよね」

「ああ、捨てちゃ、だめだよ。神様に祀つたものなので、しめ飾りと一緒にドンド焼きへ持つていくから、別の袋に入れておきなさい」

「ええつ。お母さんには種が入つていたの? これには入つてなかつたけど」

「僕にも入つてないよ」

息子たちは何か損をしたかのような口ぶりで女房が小皿に置いた種を覗き込んだ。

私はそんな彼らを少しだけ大きな声でなだめた。

「種なんか、どつちでもいいんだ。美味ければいいんだよ」

窓の外では降りしきる雪を真横に飛ばすような強い風が吹き過ぎた。一瞬、地震のように家がガタッガタッと揺れた。私は、思わず体を斜めにねじつて顔を窓に向けた。

三

小学校から帰つてくると、辰はランドセルを下駄箱の上へ「どん」と置いて、庭へ飛び出した。それから葉っぱを数枚だけ残した富有柿の木に登り、すぐ横にある鶏小屋の屋根に足をかけ、そりそりとトタン屋根を歩く。足元ではグシャグシャとトタンの凹凸の凸がひし

やげる音がする。トタンの下では鶏たちが不穏な空気に気づき、伸ばした首を小さく右や左に傾げ、仲間に注意を促すようコッコ、コッココッコ、コッココッコと喉をふるわせ発声練習をする不気味な音が足裏に響いてくる。それが悲鳴に変わらないよう、すばやく母屋おもやの丸い瓦に両足を乗せる。

庭に背中を向けて麦藁屋根むぎわらやねに両手をつき、左足を瓦二枚分だけ左へ送り、次に右足を瓦一枚分左へ送りながら、こわごわ納屋の屋根へと進んだ。白壁に屋号⑨のついた下まで来て、「ふー」と息を吐いた。そこは一日中太陽の光が当たる場所ので、白壁に沿って横に通した竹竿に数え切れないほどの柿が吊るされている。

「すっげえ。こんなに吊ったんだ。一つや二つ食っても、ばあやんにば、ばれんやろ」

瓦屋根に尻を下ろして、つるし柿を食べている辰の視線のはるか先には四国山地がパノラマのように広がっている。右端は高越山、左端は徳島市内に近い山で、眉山であろうか。その先は紀伊水道、渡れば和歌山、大阪、京都へも行ける。遠くを眺めながら、二つの予定が三つ四つと食べてしまっていた。

「カラスが銜くわえて持って行ったのか？ それとも喰ったか？ 糞は落ちていないし、なぜこの段だけみごとになくなっているんやろ？ この段も？ 歯抜はぬけに吊るした覚えはないが。落ちてもないし。どうしたことじやろ？」

ばあやんなは納屋の屋根に梯子はしこを架けて上っていた。二週間ほど前に吊るした柿の澁しぶを消すために揉み揉みをするのである。

「粉が嘖ふくまで待つと美味くなるんだが、もしや孫たちが取って食べ

(六)

ているか？ また減っている。柿の好きな孫は辰だけど。ほなけんど、幼こいからまだ梯子をよう架けんじやろ」

「この段をいただくか。粉の嘖ふいたのと、まだ嘖ふいてなくて柔らかいままの、どっちが美味いかな？ へっへっへっへっ」

辰は、くじ引きでもするかのように親指と人差し指でつまむとふんにやりした感触のする大きいのを狙って噛み付いた。

「やっぱ、柔らかい方だな。いつもこつちに手が出るわ。美味い。ほんまに美味い。たまらん。粉が嘖ふいてるのも美味いけど、これくらい柔らかいのも美味いんだよなあ。やっぱりこれに限るわ。これを食べると鶏小屋の屋根をつたって、ここまで来る怖さもふつとんでしまう。ううん、美味い、美味い。最高やで〜」

こうして辰は小学校から帰ってくる毎日のように怖さに打ち勝って、つるし柿の盗み食いをしていた。今日も瓦に尻を下ろして食べていると、庭からばあやんが怒鳴った。

「こら！ 辰！ 盗人してたんは、やっぱりお前だったんやな。減っていると思つたら。梯子を架けんで、どうやって上ったんだ。もう二回、揉み揉みするまで、待てんかええ〜！」

その怒鳴り声を鼓膜がキャッチしたとき、とっさに柿を一気に飲み込み、慌あわてて、精一杯の口答えをした。

「ばあやん！ いっぱいあるじやないか！ ちょうど今ごろが美味いんだよ！」

「まだ早い！ 降りて来い！ どうやって上ったんだ！」

「すまんがー、梯子を架けてくれんか？」

「梯子がなくて、どうやって上ったんだ！ 上ったように降りて来

い！その前に、ぜんぶ揉み揉みしてくれるんかい！」

「いや、もうええわ！降りる！梯子、架けてくれんのか!?」
「架けん！」

ばあやんは辰が屋根から降りてくる経路をじつと見守っていた。そして母屋から鶏小屋の屋根に右足をかけ、次に左足を乗せたとき、トタンが大きくきしんだ。その瞬間、足の下で大悲鳴が起こった。

「コーケッココー、コーケッコ、ケッココー」

その悲鳴が止まないうちに、庭に降り、すぐに謝った。

「もう、盗んで食わん。ごめんな。ばあやん」

育ち盛りの孫がおやつを買ってもらえないことは、ばあやんも重々知っていた。辰は頭に拳骨げんこつをくらうことを覚悟し目を閉じて首を少し下げたが、ばあやんはきつく睨にらみつけたまま強い口調で叱っただけだった。

「もうちょっと待てば、きれいに粉が噴いてもっと美味しくなるぞ。食べたいのは分かるけど、待てんか？我慢できんか？そんなことでどうするか？ 〴〵つまでもあると思うな親と金」と言うように、柿も今、ぜんぶ食べたなら、正月明けには何んにもおやつなくなるでえ？」
「分かったよ。もう盗んで食わん、と言うとるやろ。ごめん。ほんまに、ごめんな」

辰は泣きべそをかくような声で、また謝った。

次の日から辰は我慢した。夕飯まで腹がもたないときは、お櫃びつに残った冷や飯をお茶碗によそおい、醤油をかけて胃袋を満たした。

「おい。辰!! 今日早く来たんじやない！」

「あゝあ。ばあやん！揉んどのかい？」

「上がって来い！来て、手伝え！」

「よっしゃあ。今日は、宿題ないから手伝わ！」

「梯子、気いつけて上れや!!」

「うん。大丈夫や！これくらい、平気やで。なんてことないわ」

㊦の下で、ばあやんと並んで竹竿の中段から下へと揉み揉みを始めた。

「強ようしたらあかんで。優しく優しく揉み揉みやで」

そう言うと、ばあやんは「ふっふっふっ」と笑った。

「こうか。こんなかげんでええん？」

「そうや、そんなもんや。優しくせんとな、身体しんの芯あたから温あたこうならんや。なんでも同じやでえ。辰は男だから、よう覚えておけよ。ふっふっふっ」

「そうかあ。ばあやん。ずっと不思議に思ってたんやけど、この屋号じゃけどな、なんで㊦なんや？」

「これかい。これは死んだ祖父じいやんの名前が熊吉くまきちで、その熊から九と付けたんじや」

「そうかあ。じいやんは仏壇の写真でしか見たことないからなあ」

「辰が生まれるはるか前に死んだ。今でいえば、脳溢血のうえきやろな。畑から帰ってきてコップ酒を一杯飲んで、ばったと逝ったから」

「ほな、この納屋はじいやんが建てたんかい」

「そうじや。田圃たんぼを買う方に金を使う言うて、この納屋は古い木材を手に入れて建てたんじや。この家の身上しんじょうはぜんぶ、じいやんが作ったんじや」

「し・ん・しよ・う？」

「あゝ、辰には難しいなあ。身上ちゅうのは身代、財産っていうことじや。家屋敷と田圃と畑のことを言うのじやよ。田圃や畑は一町五反

もある。この辺りじゃ、大きな百姓家じゃけんな」

「そうかい。じいやんはえらい働き者やったんじやな。ぎょうさん金がかかったんじやろう」

「昔の男はみな身上を作るために一生懸命働いたもんじや。どうってことない。そういう時代じゃったけんな」

そう言うとき、ばあやんはじいやんの面影が臉からこぼれ落ちないよう目を細めた。

辰は訊くべきことをはたと思い出し、話をつるし柿にもどした。

「ばあやん。ばあやんが作るつるし柿、ほんまに美味しいなあ。何んでじゃろかなあ」

「そりゃあ、盗み食いするからやろなあ。あはっはっはっ」

「そんなと違うやろ！ ちゃんと教えてくれや」

「そうやなあ。教えたろか。美味しいのは、冷たい風にさらして、お天道様の暖もりを吸い込ませて、そのうちこうやって必ず揉み揉みするからじゃろなあ」

「揉み揉みだけでええんかい？」

「いつでも揉み揉みすればええちゅうもんやない。柿の顔色を見て、揉み揉みして欲しそうなときに美味くなれ、美味くなれって声をかけながら優しく優しく揉み揉みするんや。なんでも同じや」

そう言うとき、ばあやんは、また「ふっふっふっ」と笑った。

「そうかあ。ばあやん、柿の顔色が分かるんかい？」

「当たり前あやんのつるし柿や！（当たり前前田のクラッカー！の真似）毎年、見ると柿の機嫌まで分かるようになるわな」

「ほんまかい？ それなら名人にもなれるわなあ。ほんま、ばあやんはすごいなあ。この前、原田の明ちゃんに一つやったら、あいつんと

この母やんが作るものよりも百倍以上美味いって言うつとたぞ。また持つて来てくれて催促されたわ。ほんま俺のばあやんはつるし柿作りの名人じゃあ！」

「こら、子供が年寄りにべんちやら言うもんやない。このアホが」

「でも、ほんまに、美味しいもん」

「ありがとさん。子供に褒められてもしょうがないわ」
突き放すように言うとき、ばあやんは大きめの柿を選び、指先で入念に揉んだ。

辰は、さらに訊いた。

「なあ、ばあやん。明きちゃんに何んぞコツでもあるんかって訊かれただけ、コツあるんかい？」

「コツかあ。それはな、揉み揉みして粉が噴くやろ、その後、この袋のように皺ができて、中身が黄金色になるまで待つことや。食うのを我慢することや。そうすると、適当に水分が抜けて美味もうなるんや。砂糖が噴くんや」

ばあやんは一瞬、辰の股間を握って「あはっはっはっ！」と大きく口を開けて笑った。

「何すんねん！ ばあやん 気色わるいがな。どこ触るんや！」

思わず両膝をギユと合わせた。

ばあやんは大ぶりの柿を手に、

「辰。今日は特別や。手伝うてくれたから、この二つ味見してみよう」

「ええんかい？」

「ええがな。ここに座って食べようや」

「ありがとう」

一口、噛み付き、

「うん。やつぱり、美味しい。美味いわ」

「そうかあ。美代子もこれが好きやった」

「神戸にいる叔母さんかい？」

「そうや。辰といっしょでオトンボやな」

「中学や高校を卒業すると、近所の若い者は大阪や神戸へ出て行くなあ。お盆休みに帰ってくると、知らん言葉をしやべりよる。松本の兄やんは俺の顔みて、自分、元気にしとったかあ？」って、相手のことを自分って呼ぶそうやわ。大阪では」

「しょうがないなあ。ここには仕事がないけんなあ。若い者は出ていかなあ、あかんのや。辰が中学を卒業するころには、この辺りにも仕事のできる工場ができとるじやろかなあ」

ばあやんは手にした柿をじっと見て、そう言った。

「ばあやん。俺はオトンボだから必ず、この家を出て行かなあかん。

兄^あんにやがおるけん、俺は家を継げんからな」

辰はしつかりした口調で答えてから、また柿に噛み付き、遠くの空を見た。

「そうやなあ。継げんなあ」

ばあやんの声はしんみりしていた。

「徳島から外へ出たい。ここから見えるあの山の向こうにはどんな景色があるんやろか。この空はどこまで広がっているんやろか。見てみたい」

「……」

「出て、こことは違う所で色んな人に逢って、色んな体験をしてみたんだ。もっと広い世界を見てみたい。だから、ここに残るつもりはない」

「そうかあ。出るかあ。で、どこへ行きたい？」

「うん。京都へ行きたい。東京は行くのにも戻^{もど}て来るのにもようけ電

車賃がかかるから、行きとくない。今はあまり勉強できんけど、中学からは頑張るんだ。そして大学までいって、自分の力で卒業したいんだ。父^{ちち}やんや、兄^あんにやに頼るつもりはない。その後は、まだ分からん」

「そうかあ。京都かあ。遠いとこへ行くんやなあ。辰もオトンボだからなあ。自分で生きていかなあかんしなあ。……なんで京都がええんや？」

「あのだ、立派な大学がたくさんあってな、色んな県から高校生が進学してきているらしい。それに、社会の教科書に京都御所や金閣寺、清水寺が載っていて、そんな歴史のある建物をいっぱい観てみたいんや」

「古いもんが好きなんやなあ。……で、辰、お前、今、何年や？」

「小学四年やで」

「四年かあ。大学かあ。中学、高校もあるなあ。頑張れや。……ほなけんど、独りで電車や船に乗って京都まで行けるんかい？」

ばあやんはちゃかした。

「高校卒業するころには独りでも行けるやろ。みんな行つとるやないかあ。鴨島から阿波池田線で徳島へ行って、乗り換えて小松島港へ行って、フェリーに乗って和歌山港で降りて、南海電車で難波^{なんば}の方へ行けばええと、父^{ちち}やんが兄^あんにやに話しとった」

辰は真剣に答えた。

「そうやなあ。辰は偉いなあ。楽しみやなあ。ばあやんもその日まで生きとらなあ、あかんなあ」

そう話せばあやんの声はしみじみとしていた。

「大丈夫やでえ。心配するな、ばあやん。生きとったら俺が稼いで京都へも連れて行つたるわ」

「あはっはっはっ！ そうかあ。ほな楽しみにしとるわな。でもずっ

と先やなあ。忘れるなあ。それまでに死んでしまふかもしれん、辰。あはっはっはっ！」

「忘れたらあかんぞ。死んだら連れて行かんぞ。俺が稼ぐようになるまでは生きとれや。絶対に、なあ、ばあやん!!」

オトンボの優しい心根にばあやんは目尻の皺がほぐれて、にっこりにっこりと笑った。暖かい陽だまりのなかで、吊るした柿をなでるよ
うに、柔らかない風がさあっと吹き過ぎた。

四

「増田さん！ 増田さん！ 徳島のお父さんからお電話ですよ！」

階下から、大家おおやさんが声をかけてくれた。

「はい。すみません。いま、行きます！」

階段を降りながら、私は不安になった。なぜなら親父が下宿先に電話をかけてくることはめつたになかったから。姉の結婚式の日取りが決まったとき、従兄弟の就職先が決まったときなど（めでたい事はしばらくはいいはずだけど）。

慌ててしまつて、おもわず受話器を落としそうになった。

「もしもし、俺だけど」

「おお、辰か。ばあやんが協同病院に入院しとつて、もう永ごうないとお医者はんが言うところから、早めに帰つて来て、顔を見せろや」

「ああ。入院してるんか。分かった。ちょうど良かったわ、昨日から大学祭で秋休みが一週間あるけん、すぐ用意して帰るわ。じゃあ」

私は急いで帰省の準備をし、翌朝早く下宿を出た。途中の電車内や紀伊水道を渡るフェリーの船室では、親父の『もう永ごうない』という声が私のすべての感情を支配していた。そして車窓やデッキから、

流れていく風景をぼんやりと眺めながら実家にいたころを思い出していた。

私の勉強部屋は仏壇のある部屋の隣にあった。静かに勉強していると、夕方、ばあやんがチリーン、チリーンとお鈴を鳴らしてから、「なんまんだぶくなんまんだぶく。何んにも楽しいことがない。早よう、迎えに来てくれ。なんまんだぶくなんまんだぶく」って仏壇の祖父やんに声をかけているのを何度も耳にしたことがあった。そのとき私は歳をとれば、誰も皆、気弱になり仏壇に向つて話しかけるのだろう、と気にも留めずいつも聞き流していた。

私はなんとか希望する大学に合格をして、いよいよ実家を出ていく朝、庭先を竹箒で掃いていたばあやんに、「行つてくるから」と声をかけた。ばあやんは箒を手を持ったまま道路端で待つ親父の軽トラックのドアまで付いて来て、「身体に気いつけや、辰」と送り出してくれた。車が大通りへ出て右に曲がつて家の方に目をやると、ばあやんはまだそこに立っていた。車が見えなくなるまで見送つてくれたのだろう。あれからおよそ二年十一月、私は自活を貫くため一度も帰省していなかった。すでに働き手ではなくなつていたばあやんは寂しい思いで人生の残り時間を消化していたのだろう。

その日の夕方遅く、電車は鴨島駅に着いた。私はシャッターを下ろし始めた駅前薄暗いアーケード街を抜けて病院へと早足に歩いた。病室では、ばあやんは娘である叔母さん二人に付き添われていた。私はそのすっきり縮んでしまった細い腕を撫でながら、声をかけた。「ばあやん、辰だよ。分かるで？ 京都から帰つてきたけん。元氣になろうな」

その声の主が内孫のオトンボであることは分かつたようで、ばあや

んはかすかに目を開けて答えてくれた。

「おまはんも元気になあ」

私はさらに励ました。

「明日も来るけん、良うならなああかんですよ。ばあやん、良うなって、家に帰ろうな」

ばあやんは「はあはあはあ」と荒い息をつきながら、目蓋を半分ほど開けて、じっと問いかけるような目で私を見つめ、蚊の鳴くような声をしぼりだした。

「そうかあ。辰、ありがとうな」

これが私にとつて、ばあやんと最後の会話になった。廊下に出た私を追いかけてきた叔母の美代子さんはクシクシユシユシやくりながら礼を言ってくれた。

「遠方を、よう帰って来てくれた。ありがとうな。ばあやんも嬉しかったと思うよ。オトンボとも話ができたけんね。すい臓ガンやから、もう薬も効かんしなあ……なあ……。ほんまに、ありがとうな」

その夜、ばあやんは消灯時刻まで、まるで痛みが消え失せたかのように、取り留めないことをしつかりとしゃべったそうです。

「長こう寝てしもうたあ。大事な物は押入れの箱に入ってる。美代子、ええかあ。もう、柿をもぐころじやろ。ええかい、裏庭のは大きいから、早ようもいで干さなあかん。よう揉み揉みせんと粉が噴いてこん。辰が幼まいとき、よう盗んで食いよった。手伝いもぎようさんさせた。ほんま柿の好きなオトンボじやあ」

こうしゃべった後、「ふっふっふっ」と思い出し笑いをして目尻の皺を緩めたそうです。そして、信じ難いことですが、安心し切ったように小さな小さな鼾いびきのような息を吐きながら寝入ったそうです。

私が声をかけた最後の身内だったようで、ばあやんはそのまま目を

覚ますこともなく、次の日の夜、みんなが見守る中で静かに息をひきとりました。父やん、母やん、叔父さんや叔母さんたちが枕元で、

「かあさん！ かあさん！」

と、泣き崩れていた。

生まれて初めて肉親の死に直面した私は人の死がこんなにもつらく悲しいものかと感じ、熱い涙がとめどなく頬を流れた。

亡くなったばあやんは兄貴の乗用車の後部座席に座る叔父さんと叔母さんの膝の上に寝かされ、自宅へ帰ってきた。

通夜では、末期の水を唇に何度も何度もつけてあげた。

「ばあやん。水をつけたげるわな。ええとこへ行きや」

その皺くちなな顔を見ていると、

「揉み揉みして粉が噴いて、ここの袋のように皺ができてから食べる」と美味いんじや」

と股間を握られ、

「もうちよつと待て。我慢しろ」

と、盗み食いをして叱られたつるし柿の味を想い出した。

告別式の朝は小春日和であった。お棺に蓋をする釘を打つ前に、叔母さんは、

「かあさん、私が作ったものだから美味しくもないかもしれんけど、途中で食べてな」

と、声をかけ大振りのつるし柿を二個、胸元で組んだ手の横に添えた。出棺前、近所の小父さんはばあやんが使っていたご飯茶碗を庭石に当てて割ってみせた。これはもう帰ってきても自分の茶碗はないから成仏しろという慣わしであった。同じことは婚禮の朝、花嫁が家を出て

行くときにもおこなわれた。これも嫁ぎ先で人生をまっとうせよという慣わしであった。

お棺を霊柩車に乗せ、ハッチバック型のドアがボタンと閉められたその瞬間、ドアが内側に押した空気が逆流してきた。それは体を、ぐんと押しにくるような強い風で、私は顔を横にそむけた。カタカタと何かと何かがぶつかる音もした。思わず納屋の屋号を見上げた。柿の吊るされていない竹竿が前後に揺れて白壁に当たっていた。季節は揉み揉みをするころであったが。

五

四十九日の翌日、叔母の美代子さんが来て、ばあやんの部屋をかたづけた。部屋は納屋の入口を開けた右側にあった。

「叔母さん、手伝おか？」

私は声をかけた。

「そうじゃな。手伝ってくれると助かるわ。ほな、押入れの下の段から箱を出してくれるで。達者なときも死ぬ前にも、その中に大事な物をしまつてあるつて、言うとつたから」

「はい」

私は頭から押入れの中に入り、埃をかぶつたリング箱を引きずりながら畳まで出した。

「叔母さん、これしかないけど、これやろか？」

「それじゃろな。重かったじゃろ。ありがとう」

叔母さんは蓋を開けて、細々した物を畳に並べ始めた。私は、再び、四つん這いになって押入れに首を突っ込み、奥の物を手前に引き寄せていた。

(一一)

「母さん、こんな物までしまっていたんだ」

「何んですか？」

「臍の緒よ」

「へ・そ・の・お？」

「赤ん坊が生まれてくるときに、母親と繋がっていた臍の部分の切ったもんじゃ」

「ああ。臍ね。そうですか」

「古うなつて枯れた草の根のようになってしもうとる。全部、子供の分だけあるわ。昔の女やなあ。一つ一つ名前と生年月日を書いて、こんな物を後生大事にしまっておくなんて」

叔母さんは涙声で、そうしゃべった。

「今も、子供を生むと、臍の緒を医者からもろうて、家に置いておくんかいな？」

「今の若い女はどうじゃろかなあ。……辰ちゃんのお母さんの歳だと、きつとどの女も家にもつていると思うけど。小さな桐の箱に入れて」

「そうですか。ほな今度、母やんに訊いてみるわ。興味あるわ、自分の臍の緒を見るのは」

叔母さんはリング箱の中をガサゴソとかき回していたが、意外な物が出てきた。

「あら、辰ちゃんの通信簿が二つも出てきた」

押入れにすっぽり体を出つ込んでいた私は「ええっ？」と、そのままお尻から体を出して叔母さんの手元に近寄った。

私に遠慮することなく一つ目の通信簿を開いていた叔母さんは、「あはっはっはっ！ 兵隊さんばかりじゃあ。あはっはっはっ！」

と、歯茎をまる出しにして笑った。

私は、「こっちにかして！」と、叔母さんの手から通信簿を引つ

手繰った。それは小学一年生の通信簿であった。確かに、どの教科も兵隊さんばかりの評価がついていた。兵隊さんとは数字の1のことである。5段階評価の最低点を意味していた。これは兵隊が直立不動で敬礼をしている姿勢が1に似ていることから、郷里の大人たちはそう呼んでいた。総評欄には、担任の女性教師が書いたであろう「皆勤賞をもらいましたね。立派ですよ。増田くんは心が優しく、夢を實現できる強い意思をもっています。もう少しだけ勉強もがんばりましょう」と、万年筆の文字が鮮明に残っていた。

私は恥ずかしいやら、懐かしいやら、なんとも言えない心境であった。もう一つは小学四年生の通信簿であった。こちらは、兵隊さんではなくなり、平均点が多かった。成績が上がったのである。

「何んで、ばあやんが俺の通信簿を持っていたんやろ？」

「何んでやろなあ？ 内孫のオトンボは爺さん、婆さんになつて、可愛いつて言うから、ばあやんも辰ちゃんが可愛かつたんじゃろ。孫の中で一番、付き合いが深かつたじゃろうから。……ばあやん、辰ちゃんに期待しとつたんかもしれんな。……末は博士か大臣かつて。あはっはっはっ！」

叔母さんは先ほどよりも大きな声で笑った。

「こんなもん、残さんで金を残せや。もう」

つい心にもないことが口から飛び出した。

叔母さんは、ちょっと真顔になって訊いてきた。

「自分の物やから形見というのも変やけど、この際もろうたげて。ばあやん喜ぶわ。大事にしまっておいたようやから」

次に箱の中から黒い表紙の分厚いアルバムを両手で持ち上げて畳においた。

「このアルバム、見てもいいですか」

と、断ってから開けてみた。

すでに黄ばみ過ぎた台紙にはセピア色になった『子供のときのばあやん』、こはく色になってしまつて『化粧をし、着物を着て、すましているばあやん』、『じいさんと結婚したときの花嫁さんのばあやん』、『赤ちゃんをだっこしているばあやん』の写真が貼られていた。ていねいにアルバムを捲りながら、私は叔母さんに声をかけた。

「ばあやん、若いときは綺麗やつたんやね」

「そうじゃつたよ。そりやもう、別嬪さんだつたよ。あんな、姑の十七見た者なし」という諺ことわざがあつてな、これはな、姑がいくら若いころは美人だつたと自慢しても見た者がいないからアテにならんという意味なんよ。でも、その写真を見れば辰ちゃんも分かるやろ、ばあやんが別嬪さんだつたつてことが」

そう言つてから叔母さんは涙を噉りながら写真を覗き込んだ。

そんな写真のなかに、たぶん親父であろうつるし柿に噛み付いたまま笑っている男の子とばあやんが一緒に写つたものがあつた。それを見た瞬間、私は大事なことを忘れていたことに気づき、臉を焼くような熱い涙がこぼれ落ちた。

「ばあやんと一緒に撮つた写真がない」

六

祖母の死後から十五年近く過ぎた。私は息子たちを連れて、お盆休みに郷里へ墓参りに帰つてきていた。墓地へと続く登り坂のアスファルト道はフライパンのように熱していて、足元からモアツと膨らんだ空気が顔面を目掛けて上つてくる。容赦ない陽射しは野球帽を被る息子たちの柔らかい首筋に突き刺さりそうな強さである。

墓は裏山の斜面を削った場所にあった。正確には讃岐山脈の山裾である。近所の十数軒の祖先がねむる共同墓地である。黒灰色にくすんだ墓石たちの中には身代が交代し、若い跡取りが造り替えたのである。真新しい墓石が幾つか並んでいた。ここからは実家の家屋敷を見下ろすことができるし、遠く四国山地を眺めることもできる。元の墓地はもう少し山を登った中腹にあったのだが、年寄りが歩いて登るのは難儀だということから、この場所へ移されたのである。古い墓地とは違い墓石の周りはコンクリートが塗られている。墓地の隅にはお庵と呼んでいる休憩所もあり、墓参りに使うバケツや柄杓も用意され、水もその庭にある水道から調達できるようになっていた。

「お前たち、いいか、お父さん家のお墓は右から四つ目だからな。よく覚えておいてくれよ。この辺りには増田という苗字の家が多いからな。ここに「勇」つて彫つてあるから。これが、お前たちが生まれる七年前に死んだ祖父ちゃんの名前だ。いつかお前たちだけで、お参りに来ることもあるだろうから、これを忘れるなよ」

すると理人が、不思議そうに訊き返してきた。

「なぜ、祖父ちゃんの名前が彫つてあるの？」

「それは祖父ちゃんがご祖先様のために、このお墓を造つた、ということだ。ここに造つた年月も彫つてあるんだ。昔が生えて見にくいけど」
私は人差し指を墓に当てて字をなぞりながら「昭和二十七年八月」と、声を出して読んでみた。

微風すらなく、太陽の熱を遮るものさえないため、真上から照りつける太陽光線は墓石やコンクリートを熱し、さらに身体内の水分を大汗に変えて吸い取っていく。ただただ暑い。

「どうだ、お前たち、さすがに暑いだろう。これが本場の夏だ。北海道じゃあ体験できない暑さだな。ここでは、この暑さをカンカン照りつて言うんだ。あはっはっはっ。さてと、曾祖父やん、曾祖母やん、親父、母親、今年も暑いなあ。いっぱい水をかけたげるわな。じいやん、ばあやん！ ひ孫もお参りに帰ってきたから。とうやん、かあやん！ 孫も大きくなったから」

てっぺんから水をかけられた黒灰色にくすんだ墓石はみるみる黒い色を濃くし、変身していった。

「理人、櫛をかきなさい。この古いのと挿し替えるから。啓人、お米をここに乗せなさい」

一通りの準備を済ませ、ライターで線香に火を点けた。立てた線香の煙は墓石をつたってゆっくりと真っ直ぐに虚空を目指して昇っていった。

「さて、これでよし。はい、お前たちもちゃんと、じいやんとばあやん、祖父ちゃんと祖母ちゃんに挨拶しなさい。みんなお前たちのご先祖様だ。こう両手を合わせてするんだ」

「こんにちは。長男の理人だよ」

「ぼくは弟の啓人だよ。北海道から来たよ」

「よし、それでいいんだ。じいやんとばあやん、おじいやんとおばあちゃんが暑いのによく来てくれたなあ。ありがとう。二人とも大きくなったなあ。こんにちは！ って言ったぞ」

「ええつ。聴こえなかったよ。なあ、啓人」

「うん、何も聴こえなかったけど？」

「お父さんには聴こえるんだ。ちゃんと。あはっはっはっ。ちよつとだけ教えてやろう。この石を動かすと奥が空洞になっていて、ご先祖様の骨壺が置いてあるんだ。お父さんが子供のころ、壺の中は千年

すると、真水に変わるってお坊さんから教えられたことがある。ただし、千年だから誰も見た人はいないだろうな。それから他人様から後ろ指を指されるような悪さをする、ここからじいやんが幽霊となつて出てきて、懲らしめられるって、ばあやんに脅されたもんだ。あはつはつはつ」

「こ・つ・つ・ぼ？」

理人が訊いてきた。

「それは死んだ人の骨を脚の先から頭まで少しづつ壺に入れてあるんだ。お父さんは、このお墓には入れないけどな」

「じゃあ、お父さんの骨はどうするの？」

「まだ先の話だから……お前たちが大学を卒業するころに、お母さんと相談して決めるよ。今は心配するな」

私は家族の平穩無事な日常を報告し終ると、お墓を背にして子供たちを促した。

「見てごらん。見渡す限り、畑や田圃ばかりだろ。お前たちが住んでいる街にあるような本屋もなければ、コンビニやカラオケもない。遠くに連なるのは四国山地、流れているのは吉野川だよ。川面が太陽の光でピカピカ輝いてる、眩しいなあ。あの川は別名、四国三郎とも呼ばれている。お父さんは小学生のころ、ここがまだ墓地ではなくて丘だったころ、秋になると悪戯鬼たちと落葉の上でソリ遊びをしたり、野兎を追っかけて遊んだもんだ。♪ 兎追いし、この丘で♪ っとな。そして、この景色を眺めながら将来を想像したもんだよ。どんな大人になるかって。……郷里っていいよなあ。とくに、田圃を見ると、お父さんは心が落ち着くよ。やっぱり、農耕民族だなあ」

感傷に耽る私とは違い、啓人は望遠鏡を覗くように目をキョロキョロさせていた。そして何かを見つけたようで、人差し指をさして、言

った。

「お父さん、あの木は何んなの。ほら、あそこの田圃の横にあるよね、あれ、あの木だよ。あんな所にポツンと二本あるなんて不思議だね」

「どれだ？」

「ほら、その松の木がたくさんある手前の竹藪の横の段々になった三つ下の田圃の左にある木だよ。あそこにだけあるもの」

私は腰を下げ、顔を啓人の目の高さに合わせ、彼の指先をじつと見つめた。

「どこを見てるんだ？ どこだあ？ あゝあ、あれか？」

と、私も人差し指を突き出した。

「そう。あれだよ。あそこ」

「あれは柿の木だよ。きつと」

「あれが柿の木なんだ。じゃあ、しぶ柿かなあ、甘い方かなあ」

「実の形をみれば、たいてい見分けがつくけど、ここからじゃあ判らない。近くへ行ってみよう」

もう一度、親子三人は横一列に並んでお墓に向って手を合わせ、私は「また、帰ってくるから」と、声をかけた。

バケツと柄杓をお庵に返し、それから坂道を下りて、青い稲穂が子供たちの短パンの膝小僧をこする畦道をジグザグに歩き、柿の木の根元に来た。その大枝は太陽の熱を遮るほど伸びており、日除けにはもつてこいの場所であった。小枝の先にはまだ青い実が鈴なりに生なっていた。

「うん。そうだな、こっちはしぶ柿だ。つるし柿をそのまま膨らませたような形をしてるだろ。こういうのはたいがいしぶ柿だよ」

「円錐を逆さにした形をしてるんだね。僕の手の平よりも大きいよ」

「この皮を剥いて干すと水分がぬけて縮むんだ」

「そっかあ。でもこの円錐、きれいだね」

啓人がしぶ柿にこだわっていると、理人が、

「じゃあ、お父さん、あっちにある四角いまま、膨らんだようにみえるのは、甘いのか」と、訊いてきた。

「そうだ。きつと富有柿だと思うよ。あれは十月の体育の日あたりになると十分、食べられるよう熟すのさ。小学生のころ、運動会は体育の日であつて、休憩時間にはよく食べたよ」

右手を幹につけ、見上げていた理人がまた不思議そうに訊いてきた。

「でも、たくさん生なっているね。柿かきって、こんなに実をつけるんだあ」

「そうだな。この木は花が咲いて、実がつくころにきつと消毒をしたのだと思うよ。木でも何でもそうだけど、害虫がつかないように大切に育てないと実はつかないから。柿の実の花は、また可愛いんだ。白い花びらの真ん中に黄色い雌しべがあつて……花はここに住まないと見られないけどな。北海道じゃ無理だな」

花が無理ならと、何かいいアイデアを思いついたと目をキラキラさせて、啓人が訊いてきた。

「しぶ柿を北海道へ持って帰って吊るせば、つるし柿になるかな？」

「どこに吊るの？」

「二階のベランダにある洗濯物を干す竿でいいんじゃないの？」

「あそこかあ？ 吊るせばきつと食べられるものになるとは思うけど、吊るすタイミングが難しいだろう。北海道は秋といつても寒いら。しっかり見ていないと凍っちゃうよ」

「そっかあ。ちよつと残念だなあ」

啓人が悔しがる、理人が横目で睨むように、

「何、残念がつてんだよ。やつてみればいいじゃないか」

と、口を尖らせた。

「でも、お父さんの実家にはしぶ柿の木は、もうないよ。古くなって枯れてしまったそつだ」

すると息子たちは、

「残念、残念だあ！ 揉み揉みも面白そつだし、やつてみたかつたあ」

と、手で幹をパッシパッシと叩いた。

しかし、私は、「あきらめることはない。しぶ柿の木なら、まだ伯母さん家にはあるぞ」と、可能性をほのめかした。

息子たちが柿に興味をもつてくれたことが嬉しくて、私は続けてしゃべつた。

「柿かあ。色々、悪さをした思い出ばかりだなあ」

「ばあやんが作つたつるし柿を盗み食たいただけじゃないの？」

「ああ、他にも、もつと色んな悪さをしたよ」

「えくえつ。お父さんが？ ……どんな？」

「例えばだな、近所に大きな空き家があつてな、その庭にはぶどうの房のような小さい実をつける柿があつてな、その木に悪餓鬼たちと登つて、実を取つてはぶつけ合あいをして遊んだんだ。農家の子供が食べ物たべものを投げたり、勝手に他人の庭に入つて悪さをしたことを、その後、思い出すたびに反省したよ。ほんとバカやつていたよな。それから……」

「えくえつ。まだあるの？」

「ああ、おやつなんか買つてもらえる家ではなかつたので、よく甘柿を盗み食たいたんだ。これも悪餓鬼たちとやつたことだけだ」

「お父さん家にも甘柿の木はあつたのでしょ？」

「うん。あったよ」

「なの、なぜ盗み食いなんかしたの？」

「そこが子供なんだよ。悪ふざけというか、自分家にあるにもかかわらず、どこかの畑の横にある柿を狙うんだなあ。これがなぜだか分からない。味もそう違わないのに。あはっはっはっ」

「お父さんからはぜんぜん想像できないよ」と作り話でも聞かされたように、「嘘でしょ」という目付きをして、啓人が私を見上げた。

「そんなことが許された時代だったんだな。腹を空かせた近所の子供が一個や二個、盗んで食ったっていいじゃないかって。大人たちはひもじい子供の心をちゃんと理解してくれていたんだらうな。そのうち何回かは、＼こらー 盗人！ どこの子だ！ こらー 巡査に言いつけるぞ！＼ って追っかけられて、逃げたこともあったよ。でもなあ、そんな悪さばかりしていたから、遠くこの郷里を離れて北海道に住んでいると、ここが無性に恋しくなるときがあるんだ。悪さをして叱られたことしか思い出さないけどな。……でも、いいなあ、お前たち、お父さんたちが悪さをしていたのは小学生の四年までだからな。五年になってからは一度もそんな悪さをしたことはないからな。いいな」

「そうかあ、お父さんは子供のころ、近所の人たちに色々迷惑をかけるいたずらをしていたんだね」

理人が確認するような声音で言った。

「それでな、大人になってからはこの郷里の人たちに何か恩返しをしなければと思うようになったんだ。一生懸命、勉強して立派な人になつて、＼あの悪餓鬼がこんな立派な人物になったのか＼ って言ってもらえるように頑張ったんだ。でも、立派にはなれなかったかな。あはっはっはっ。でもいいんだ。迷惑をかけた分だけさらに頑張ろうって、思っつてやってきたから。やっぱり、自分が生まれ育ったところは原点

だよな。お前たちも北海道以外のこんな暑い所にお父さんの実家があるって、伯父さん、伯母さんや従兄弟がいて、何かの機会に訪ねて来れるっていうのも嬉しいことだらう」

「そうだね。今もあるお父さん家の屋号の下でつるし柿の揉み揉み体験もできるかもしれないしね」

そう言うと、啓人はにっこり笑った。

「嬉しいことを言ってくれるなあ。さすがお父さんの息子だ。お墓の中にいるばあやんが聞いたらきつと喜んで飛んで出て来て、思いっきり抱っこしてくれるぞ。……でもなあ、啓人。今は、この子供たちもスーパーで売っているお菓子の方に興味があつて、つるし柿を作っても食べないそうだよ」

「へえ。あんなに美味しいものを食べないんだあ？」

「他にもっと美味しいものがたくさんあるから、しょうがないよなあ。……しゅ柿は別の食べ方もあるけど、今はどうかなあ。食べていないかもなあ」

「お父さん、吊るす他に食べ方があるの？」

理人が不思議そうな顔で訊いた。

「あるんだ。二つの方法が」

「どんなふうにして食べるの？」

「一つは焼酎漬^{しょうちゅうづけ}けた。お酒に漬けるんだよ。そうすると渋が抜けるんだ。もう一つは一個だけ獲らずに残しておく……」

「なぜ、一個だけ残すの？」

「『木まもり』といつて、来年はもつと実を付けて欲しいというおまじないかな。あるいは木への感謝の思いかもしれない。今年もたくさん美味しい実をありがとう、つて」

「ふくん。残すと、実はどうなるの？」

「枝から落ちる寸前まで獲らずに残しておくに熟すんだ。すると自然と渋が抜けて、甘くなるんだな。それを枝からもぎ獲って、皮をクルクルと剥きとり、つゆを地べたにたらたららしながら食べるのさ。渋いときはカラスも啄かないけど、獲り残して熟れすぎて、プーンと甘ったるい香を放っているものは喰っているよ。カラスも賢いからちゃんと甘くなる時期を知っているんだな。カラスが葉っぱの落ちた木の上で柿を啄いている光景は一枚(幅)の絵(画)になるぞ」

「そのカラスも見てみたいね。兄ちゃん」

「うん。いつごろ、カラスは来るの? お父さん」

「そうだなあ。十二月の中頃か年明けに、まだ枝に残っていれば、来るよ」

「根雪になるころかあ。じゃあ、お父さん、次にお参りに帰ってくるときはそのころにしようよ。なあ、啓人も」

「うん」

まだまだ夏の太陽は高く、ふと顔を丘に向けてと整然と並んだ墓石たちのうち幾つかの頭部に眩しく反射していた。

私は、右手を幹にあて、愛おしむよう枝を見上げてから息子たちに声をかけた。

「さあーて、日射病になったら大変だ! お母さんに叱られるぞ! 伯父さんと伯母さんが待っているから、もう帰ろう」

親子三人は縦一列に並んでジグザグに畦道を歩き、坂道へ出てゆくりと下って行った。

(了)

付記一。木山捷平の「おじいさんの綴方」(『おじいさんの綴方 河骨 立冬』講談社文芸文庫、二〇一三年)を読みながら、私は祖母にまつわることが幾つか思い出しました。祖母は、私が大学三回生のときに亡くなりました。私が郷里のことをことある事に聞かせるものだから、二人の息子たちも曾祖母の人柄に興味をもったようです。それで私も祖母のことについて、少し思い出を書き残しておきたくなりましたので書いてみることにしました。

童話作家あまきみこの作品に「さよならのうた」があります。竹とんぼをめぐる祖父と孫との心のつながりを詩情豊かに描いた作品です。この中で「竹とんぼ とんとんとん とんぼに なあれ とんぼに なつて とんでいけえ」という歌が歌われます。私の郷里では未っ子のことを丁寧におトンボと呼びます。オトンボとは、この歌の中の竹とんぼが手を離れると何処へ飛んでいくのか分からない(農家の長男と違って家に縛られず、自由に生きられる)、ということと同じ意味で、未っ子は家に縛られることなく、自由気ままに何処へでも出て行ける、飛んでいける、という意味であろう、と私は理解してきました。違っているかもしれない。しかし、確かにオトンボである私は「さよならのうた」を読了後、祖母が作ってくれた「つるし柿」の美味かったこと、納屋の瓦に座って交わした祖母との会話を思い出し、目尻を人差し指と中指で拭いながら、この文章を作りました。あまきみこ「さよならのうた」『あまきみこ童話集』ハルキ文庫、二〇〇九年所収。

付記二。渋柿の皮を剥いて、吊るすのは祖母でした。子供のころ、私はこのまだ完熟しない「つるし柿」を食べては祖母に叱られたものです。当時、鶏小屋の横に富有柿の木があり、この木に登って小屋の屋根から母屋の瓦屋根をつたって、納屋の屋号④の下まで辿り着いていました。子供だったので、梯子を直接納屋の屋根に架けるには力不足だったので。盗み食いをするという悪知恵はあつても母屋と納屋の瓦屋根をつたい歩きするのは怖かった。最大限の悪知恵と勇気を振り絞って、この盗みを決行していました。

育ち盛りの男の子です。完熟するまでに揉み揉みをし、白い粉が噴くまで待つべきですが、こんなにあるじゃないか、一個だけなら食べてもよからう、もう一個食べてもよからう、と毎日食べるものですから、みるみるうちに柿はなくなってしまうました。揉み揉みをする祖母には、「熟れるまで待つてから食べると美味しいのに」と、よく叱られたものです。おやつのない時代の

ことでした。腹を空かせた男の子が待ちきれぬはずもありません

正月のしめ飾りにつける干し柿をみると、そんな働き者であった祖母の姿が
瞼の奥に浮かんできます。冷たい風にあたり、揉み揉みをされ、太陽の暖
もりを吸い込んで、吊るされている柿は祖母の味を醸しだしてくれていま
した。

なお、取り残した柿をカラスが啄む光景は、須藤克三（一九七二）『出
せぎカラス』童心社、六頁に描かれています。

